

## 第4講：138「物は大切に」

この逸話を読み解くにあたって、次の3つのポイントを取り上げたい。

1. 教祖は、十数度も御苦労下されたが、仲田儀三郎も、数度お伴させて頂いた。
2. そのうちのある時、教祖は、反故になった罫紙を差し入れてもらってコヨリを作り、それで、一升瓶を入れる網袋をお作りになった。
3. 「物は大切にしなされや。生かして使いなされや。すべてが、神様からのお与えものやで。さあ、家の宝にしときなされ。」と、お言葉を下された。

## 1. 教祖の御苦労と仲田儀三郎

仲田儀三郎（前名は佐右衛門、明治6年頃、亮、助、衛門の廃止で改名）は、天保2年（1831）現天理市豊田町に生まれ、文久3年（1863）、妻の産後の患いから入信している。まだ、他に信仰する人のほとんどなかった頃のことである。現在に名前が残っている範囲で、中山家以外では、第一番目の信者と言ってよい。最も早い頃から、教祖のお側に仕え、

いつも教祖のお側に仕えて、教祖とともに苦労をし、また、取次人として集って来る信者たちに親神様のお話を取次ぎ、各地へおたすけに行ったり、おてふりを教えに行ったり、ある時は警察や監獄に拘留されたりしたこともありましたが、それに屈せず人だすけのために働きました。（高野友治『先人素描』天理教道友社）

とされる。教祖からは「佐衛門さんは、私の一の子供や」（中田武彦「初代 仲田儀三郎」『みちのとも』昭和35年11月号）と言われたと、伝えられている。

そんな仲田儀三郎と教祖の御苦労は密接な関係にある。「御苦労」というのは、おもに教祖が官憲に拘引され、留置・拘留されたことを表現している。

明治7年、仲田儀三郎と松尾市兵衛が、教祖の「どういふ神で御座ると、尋ねておいで」との指示で、大和神社へ問答に行ったことをきっかけに、官憲からの取締りが厳しくなり、その後、度重なる教祖の御苦労がつづくことになる。仲田もたびたび、拘留を経験している。明治19年、教祖の最後の御苦労の際も、仲田がお伴する。そして、最後の御苦労のお伴から帰ってきて、まもなく出直している。

このようにみると、教祖の御苦労には、いつも仲田儀三郎が付き従って働かれたことが分かる。この道の草創期、周りから理解されにくい、苦労の多い道中、教祖のお伴をされた先人であったことができる。

## 2. 反故になった罫紙

この138話の逸話には具体的な日付がないので、何時のことかはよく分からない。『逸話篇』の「はしがき」によれば、逸話は年代順に配列されており、年月日についていない逸話はほぼこの頃と思われる所において編集したとある。したがって、前後の逸話から判断して、およそ、明治16年頃のことではないかと思われる。

仲田儀三郎が教祖の御苦労のお伴をしたことが分かっているうちで、明治16年頃に最も近いのは、明治15年10月である。このときには、10月29日から12日間、奈良監獄署で御苦労になった。この間、毎日、眞之亮（初代真柱）らが差し入れに通ったと記されている。今回の逸話では、「反故になった罫紙」を差し入れてもらい、コヨリを作り、それで一升瓶を入れる網袋を作られた。そして、それを教祖は監獄署を出てお帰りの際、お伴をした仲田

にお与えになったのであった。

## 3. 物は大切にしなされや

さらに、網袋を与えられる際、教祖は、

「物は大切にしなされや。生かして使いなされや。すべてが、神様からのお与えものやで。さあ、家の宝にしときなされ。」と仰ったのである。

「物も大切に」するということは、いわば一般道徳として、同じようなことはいたるところで言われている。ここで、奈良監獄署で御苦労下された教祖の仰る、「物は大切に」とはどういうことであろうか。この逸話における教祖の「物は大切に」という言葉は、単に物を捨てないとか、なんでも大事にとっておくということではなく、「生かす」ということを教えられている。反故とは書きそこなったりして不要になった紙。そうしたものでさえ、皺を伸ばして、生かして使うことを教祖は身をもって示されている。

さらに、「物は大切に」という言葉の含意を深く理解するには、次の逸話がヒントになる。

45話「心の皺を」では、皺だらけになった紙も、丁寧に皺を伸ばせば何なりと使われる、落とし紙や鼻紙になったらもう引き上げるとは出来ぬと言われ、さらに、

人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。心も、皺だらけになったら、落とし紙のようなものや。そこを、落とさずに救けるのが、この道の理やで。

と諭されている。物を大切にすることとは、人をたすけるのと同じことだと諭されている。

また、64話「やんわり伸ばしたら」においても、皺紙を伸ばして使う話がある。ここで注目するのは、おぢばが恋しくなって帰ってきた泉田藤吉が、教祖の「こんな皺紙でも、やんわり伸ばしたら、綺麗になって、又使えるのや。何一つ要らんというものはない。」というお諭しをいただいて、喜び勇んで大阪に帰り、また一層熱心におたすけに廻った、と記されていることである。

こうしたお話から、皺紙をやんわり伸ばしてほしいとの教祖のお諭しは、何からでも人を大切にすることにつながり、そのように、人をたすけるのやで、とこの道の先人たちの心を強く打ったものと思われる。したがって、反対に言えば、物を粗末にすることは、人を粗末にすることに通じる、ということにもなるのかもしれない。

## おわりに

物がたくさんある現代において、物を大切にするには、より一層の心が必要である。その心の根本はどこにあるかと言えば、「すべてが、神様からのお与えものやで」という言葉に示唆される、「かしもの・かりもの」の世界に、われわれは生かされて生きているということである。

『信者の菜』の「誠真実」の項目に、次のような一節がある。

天よりお与え下されて、天の御守護で出来たものなら、たとえ一寸のきれ、一粒の穀物でも、すたらんように心がけ、すべて、物が無駄にならぬよう、粗りやくにならぬよう、大切に、そして一方、一列兄弟のなんじゅうを救う心をはたらかし、(中略) 何事も人の心に満足あたるよう、日々に互い立て合い、扶け合いという心を働かしていくように、お願いします。

この逸話は、反故の紙を通して、あらゆる人も物も親神から「陽気ぐらし」するために貸し与えていただいたものであり、親神のご守護によって生かされていることに感謝し、たすけ一条の心で生きることを教えられている。